

こどもたち
TEKNA

2010年イースター号

テモテ教会の太田博之さんが、2月15日、12時40分に天に召された。最後まで、多くの方々と共に聖書を分かち合う時間を大切に生き抜かれました。太田さん著書、立教学院の会報「チャペル・ニュース」に連載された拙稿をまとめられた本、「主は生きておられる」（2006年9月発行）から、ひとつ皆さんと一緒に読んでみましょう。

十

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

「他人は救ったのに、自分は救えない。メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架に付けられた者たちも、イエスをののしった。昼の12時になると、全地は暗くなり、それが3時まで続いた。3時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。（マルコによる福音書15章31節～35節）

聖書の中で、ことにこの場面は、何回読んでも緊張します。マルコによる福音書では、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と一言だけ大声で叫ばれ、そして、息を引き取られた時大声を出されたと記されています。他に十字架上で、お声は出されていません。この言葉は、ダビデの詠んだ詩篇22編の冒頭にあります。イエス様の数百年前に書かれた、詩篇とイザヤ書の中に、受難の預言が驚くほどはつきりと生々しく記されています。速水チャプレンは、詩篇とイザヤ書をイエス様は愛読していたと思うとおっしゃっていました。聖書の預言を通し、そして直接、神様から受難の啓示を受けたれていたのでしょうか。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

大声で叫ばれた最後の言葉から、大きなエネルギーが発せられているように感じられます。この言葉の受け止め方はいろいろあると思います。聖書が何回読んでも新鮮なのは、受け止める自分が変化しているからなのでしょう。今、私は

この言葉から、イエス様が最後の最後まで神様の御心を尋ね、確認し、従って
いこうとされる、ひたむきなお姿を感じます。「神の子」は、神様と権威を
持つことではなく、神様に全く従うことによって「神の子」となられたと思
います。

織田信長によって焼かれた甲斐の慧林寺で、快川禅師は、「心頭滅却すれば
火もまた涼し」と端座して焼死されたそうです。ずいぶん前になりますが、
創価学会の方がトラクトを持って訪問され、家の者がうちはキリスト教です
からお話したところ、「どうして、十字架で殺された方を拝むのですか」と質
問されました。日蓮上人は、現世での救済を願い、天変地異が相次ぎ、蒙
古の襲来も心配される内憂外患の困難の時、法華経に帰依することによって
救われると一身を投げ打ち、多くの法難をお受けになられながらこれに屈
せず、精力的な布教を生涯なされたと伺っています。

十字架で死んでいった、イエスキリストを、パウロは、フィリピの信徒への
手紙で次のように述べています。

キリストは…へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従
順でした。このため神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお
与えになりました。

さて十字架の場面に戻ります。

…イエスは大声をだして息を取られた。…百人隊長は、何の抵抗もせず、
「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と叫んで死んでいかれたイエス様と、
そしてそのイエス様をしっかりと抱かれて神様に大いなる力を感じたので
しょう。十字架の死に至るまで順調であったイエス様を、神様は復活させ
られました。

「わたしについてきた者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に
従いなさい」 (マタイによる 16章 24節)

1999年4月

十

子供達がまだ小学生の頃だったと思います。夏休み、友人の誘いで 湯の丸
(長野県)にあるマルチン教会シャロームロッジにお邪魔しました。その時に
友人家族と共に歓迎してくださったのが太田さん(との初めての出会い)で
した。

私のパートナーはクリスチャンではありませんので、当然、いつも教会には後ずさり気味の思いを持っておりますが、太田さんは そんな彼の心情は”全くどうでもよい！” とばかりに、笑顔で、あの立派な体格で、心身両面から歓迎ムード一色で迎えて下さいました。そして、（当時も）なかなか教会に行けない私には お会いする度に”どう 元気？” と、必ず声をかけて下さいました。が、決して”教会に行ってますか？” と、言われたことはありませんでした。しかしながら、なぜか太田さんにお会いした後に、”教会に行っていないなあ～” と自問自答する私がありました。

太田さんは中学からの立教育ちです。学生時代、池袋周辺、ことに東上線沿線に聖公会の教会が一つも無いということで、マルチン教会が建てられたのですが、その準備から精力的に関わっていらしたと聞いています。当たり前、何も無い！ところから、種まきされてきた太田さんには、とにかく人を拒まない！特に若い人たちを後押ししたいパワーがみなぎっており、お会いするたびに元気を頂いていた気がします。

2000年にBSF（聖書に親しむ会）を立ち上げ、教会の枠を取っ払って、聖書を読みたいグループの要請があれば、可能な限り積極的に 聖書を読む会に参加されました。MJMでも、2006年度から、毎年6月例会に 共に聖書を読む機会を得ました。

ザーカイさんの話やマルタとマリアの話等、聖書では比較的何度も読まれている馴染みのある話ですが、これが不思議！と以前に読んだ時とは違った発見や別の思いが心に浮かび、新鮮な気持ちで管区事務所を後にした記憶は つい最近の事のように思い出されます。

今年ももう2ヶ月で6月がやってきます。

太田さんと共に例会を迎えることはできませんが、5回目のBSFをおこないます。毎年続けて、キャンドルの火を消さないようにしたいですね。きっと太田さんは私達の心の中に着座して

”種まきやってるかい～？”

”聖書読んでるかい～？”

いつも問いかけてくださっている気がします。

そんな思いを持つのは私だけでしょうか？

太田さんに感謝です。

元村多恵